

Bern名誉会員による祝辞でした。当日のメイン会場のステージは能舞台で、舞台の保護のため靴を脱がねばなりませんでしたが、まわりは芝生と木立に囲まれていて、瓜畑はなかったのが幸いでした。

最後に、過去29年にわたり本学会を支えてきて下さった歴代会員のみなさまに対して深く敬意を表したいと思います。また、現会員のみなさまには本学会をますます発展させ

ていって下さるようお願い申し上げます。

これまでの活動の一端を偲ぶよすがとして、大会(含む設立総会)の行われた場所を「日本列島動物キメラ地図」に記入したものを本文に添えます。この地図は1997年に川島誠一郎会長(当時)が開催委員長となって横浜で行われた国際比較内分泌学会議の際のプログラムの表紙からの転用です。

日本比較内分泌学会設立30周年によせて

初代会長 小林英司
第2代会長 石居進

1. はじめに

本学会が数え年30周年を迎えたことは、御同慶の至りであります。想えば外国人約70名、日本人約80名が参加した第3回国際比較内分泌学会議(1961年・大磯・議長 竹脇潔教授・図1)の成功は、単に科学的知識の交換のみならず、外国人との共同研究の始まり、若い研究者の留学など種々の面で新しいことを生み出した。当時、日本では国際学会は珍しく、他の学会をも刺激した。このような熱した背景の下に、日本比較内分泌学会を設立してはという要望が起こり、翌年、石居進、日高敏隆、江上信雄の諸氏が竹脇教授に設立についてご意見を伺い賛同を得た。しかし、諸事、時期尚早で、すぐには旗上げには到らなかった。その後、下記の経過のように設立に動いていった。この設立の一番のmotive forceであったのは石居氏で、用意周到で、各方面に礼をつくして設立された。以下に石居氏の筆になる「学会設立までの経過」(日本比較内分泌学会ニュースNo.1, 1975年10月)を許可を得て再録させていただいたが、当時に思いを馳せて、今後を考えていただく糧になれば幸いである。

2. 学会設立までの経過

(1975年10月ニュースNo.1に石居記)

1961年6月に、神奈川県大磯において第3回国際比較内分泌学シンポジウムが竹脇潔博士を議長として開催された。その際、日本にも比較内分泌学会を設立してはどうかという意見が多く研究者から出されたが、実現には到らなかった。

しかし、内外の趨勢から、日本においても系統発生的視野から分子生物学的視野までも含むような、広い視野に立った比較内分泌の発展を要望する声が一層高くなってきた。現状では、このような分野の研究者はその所属が理・医・薬・農学など多方面にわたり、相互の連絡が必ずしも十分ではない。ここに相互の連絡を密にし、情報の交換、研究の協力をよりよく行われるよう推進する母体としての比較内分泌学会を設立したいという多くの人々の要望を背景に、1975年1月19日、青戸偕爾、石居進、井上栄、岩澤久彰、内田清一郎、小川瑞穂、小黒千足、大滝哲也、大西英爾、加藤勝、金谷晴夫、川島誠一郎、鈴木善祐、曾我部博文、田名部雄一、玉置文一、日高敏隆、日比谷京、平野哲也、藤田尚男、見上晋一、森田之大、山本喜一郎、山本芳弘、

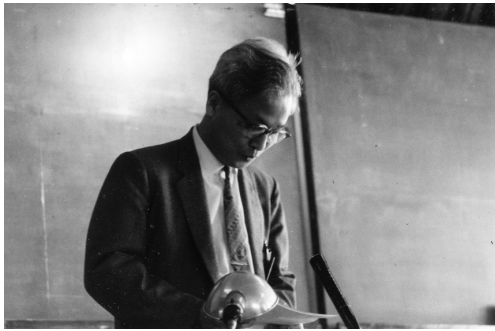


図1 第3回国際比較内分泌学会議(大磯, 1961年)
議長 比較内分泌学の開拓者 竹脇 潔教授
古式の電気スタンドに注意

らの24名が小林英司氏を代表として世話人になり、学会設立計画の発議を行った。同年2月1日、上記の世話人の連名で、設立趣意書原案と発起人依頼書が70余名の人々に発送され、そのほぼ全員が発起人になることを承諾した。同年2月22日、文京区弥生の日本学会センター会議場に、発起人のうち42名が集まり、発起人会を開いた。この時点で発起人は100名に達した。まず発起人会議長として群馬大学の山本清教授が選出され、ついで、世話人代表の小林英司氏から学会設立の趣旨の説明が行われ、ついで各界を代表する花岡謹一郎、伊藤四十二、内藤元男、日比谷京、藤田尚男、志田圭三、沼野井春雄氏から賛意が表せられた。ついで活動方針についての討議が活発に行われ、各分野から13名の設立準備委員(後述)を選出した。なお、この学会設立計画は関連の深い日本動物学会、日本内分泌学会関係者にも報告され、両学会の役員の方々からも賛意がよせられた。

その後、3月24日、5月24日、7月19日に設立準備委員会が開催され、会員の募集、学会設立総会、第1回シンポジウムの準備などが行われた。

1975年7月24日、25日の両日、日本比較内分泌学会(仮称)第1回シンポジウム「比較内分泌学の最近の進歩I」が、台東区上野公園、国立科学博物館講堂において開催され、第1日目(24日)の正午より、設立総会(第1回総会)が開催された。総会議長として山本

清氏が選出された。まず、設立準備委員長の小林英司氏から、これまでの経過説明と学会設立の提案がなされ、出席者全員の賛同が得られたので、山本議長より日本比較内分泌学会の発足が宣言された。ついで、第1期役員を選出に移り、設立準備委員が第1期の役員をつとめるという原案が可決された。また第1期会長として設立準備委員長の小林英司氏が推薦され、これも承認された。すなわち、小林氏を会長に、幹事として鈴木善祐、大滝哲也、小川瑞穂、石居進(以上庶務担当)、志田圭三、日比谷京、金谷晴夫、遠藤浩良、中井康光、片倉康寿、田名部雄一、(以上企画及び広報担当)、平野哲也(会計担当)の諸氏が会の運営に当たることになった。また、監事には、菊山栄、高橋由雄の両氏が決定した。

そこで小林英司新会長の挨拶があり、続いて今後の事業計画として、年1回のシンポジウムを行うこと、サーキュラーを発行し会員相互の情報交換を行うこと、随時、技術講習会、講演会などを開いていくこと、現在のところ学会誌の発行を行う予定のないこと、などが小川幹事より明らかにされた。また、学会費として年額1500円を徴収することが平野幹事から提案され承認された。

最後に東京大学名誉教授、川崎医科大学教授の竹脇潔氏より祝辞がよせられ、またヨーロッパ比較内分泌学会会長Andreas Oksche博士、アメリカ比較内分泌学会会長Donald S. Farner博士、ワシントン大学Aubrey Gorbman教授、カリフォルニア大学Howard A. Bern教授からの祝辞が披露された。後にインドの比較内分泌学会会長のThaplyal教授からも祝辞が寄せられた。

また7月24日午後6時より、上野精養軒屋上ビアガーデンにおいて盛大な懇親会が開催され、同席上で東京医科歯科大学名誉教授、現埼玉医科大学学長の落合京一郎氏に祝辞をいただいた。(以上石居記、ニュースNo.1, 1995より)



図2 第3回国際比較内分泌学会議エクスカーション(箱根)のホテルの歓迎看板
「国際比較内分泌学会議様お席」が、怪しげな「国際企画クラブ内文士会議様お席」となり“比較内分泌学”が世に知られていなかった事を示す(1961年)

3. 学会設立初期(小林記)

以上のようなことで小林は初代会長に推され、10年間会長を勤めた。この間、石居庶務幹事や小川幹事らとはかり学会ニュースを発行したが、当時ニュースは学会長や各種委員会の委員長の方針と報告、総務の事務連絡などのほか世界の学問的トピックスを登載する事を目的とした。総説はシンポジウムの内容と共に本として学会の財政に資するよう考えていた。何れにせよ学会のニュース発行は当時珍しいことで、世界中の諸学会でも新しいことであった。シンポジウムは毎年開催しなくても、随時、本部の企画で大きい都市で開催し、内容を本として出版して学会の財政的な援助とすることを考えていた。大会は各地方で異なった生態系がみられる環境の下で、若い研究者の発表の場とし、かつ地方の人に接するよう意図してはと考えていた。沖縄、三宅島、小笠原、グアム、ハワイ(日本と合同)など離島作戦も視野の内であった。沖縄は山里清、渡嘉敷 宝氏らの御努力で成功したが、三宅島は前々回の爆発で頓挫した。現在では島民の早期帰島を祈っている。以上の他に、新しいテクニクの講習会なども開催され、講師の諸先生方にお世話になった。

学会発足後10年の歴史は、時の庶務幹事

和田勝氏によりニュースにまとめられているが、それ以後のものはない。いつの日にか、10年以後の学会の足跡がまとめられることを望んでいる。設立10周年には、石居進氏(当時の学会長)が設立10周年記念委員会を編成し、小林を委員長とし、行事として「内分泌器官のアトラス」(小林・Gorbman・和気・守・松本編)と「ペプチドホルモン」(浦野・矢内原編)を刊行した。アトラスは石居・松本編でSpringerから英文でも発行され、斯界の注目を浴び世に貢献した。

次に、大会の開催地を現庶務幹事山本和俊氏にまとめていただいた(附表1)。ご覧になって各地での大会の思い出に資していただきたいと思う。残念ながら委員長であった大氏正巳、矢内原昇、今井勝俊の諸氏が亡くなられた。ご冥福をお祈りする。この30年の間、1987年に第1回アジア・オセアニア比較内分泌学会(大西英爾委員長)と、国際比較内分泌学会連合会(当時会長石居進氏)の下に1997年第13回国際比較内分泌学会(川島誠一郎委員長)が成功裡に開催されたことは特記すべきことである。会員として以上の大会やシンポジウム開催のご尽力に対して厚くお礼を申し上げたい。

4. おわりに(小林記)

1961年大磯の国際シンポジウムでコピー機を使用していたが、当時は外人にも目新しいく、会は進歩的であった。しかし、エクスカーションで箱根を訪ねた際、旅館で昼食をしたが、座敷の入り口の案内ポスターに附図2のごとく書かれていた。恐らく電話予約だったのであろう。比較内分泌学会議が怪しげな非進歩的な会となっていた。しかし考えればこのポスターにも独創性が伺える。今では学会も発展し、このようなことは起こらぬであろう。学会の今後の発展を心から祈っている。

附表1 日本比較内分泌学会大会及びシンポジウム開催地

1975年(昭和50年)(東京都)(小林英司)
日本比較内分泌学会(仮称)発足第1回シン
ポジウム(設立総会)

7月24～25日 国立科学博物館講堂(東京
都台東区上野公園)「比較内分泌学の進歩
1」

第1回大会(岐阜県)(田名部雄一／委員長)

1976年(昭和51年)3月26～27日
岐阜県市町村会館

第2回大会(岩手県)(見上晋一／委員長)

1977年(昭和52年)8月28～29日
岩手大学農学部5号館

第3回大会(島根県)(大氏正己／委員長)

1978年(昭和53年)10月20～21日
島根県民会館

第4回大会(沖縄県)(渡嘉敷綏宝／委員長)

1979年(昭和54年)11月27～28日
沖縄貯金保険会館

第5回大会(富山県)(小黑千足／委員長)

1980年(昭和55年)10月18～19日
富山大学理学部

第6回大会(徳島県)(大黒成夫／委員長)

1981年(昭和56年)7月11～12日
徳島大学医学部臨床第1講堂

第7回大会(愛知県)(矢内原昇／委員長)

1982年(昭和57年)7月30～31日
岡崎市民会館

第8回大会(広島県)(川島誠一郎／委員長)

1983年(昭和58年)5月28日
広島大学学生会館

第9回大会(群馬県)(若林克己／委員長)

1984年(昭和59年)7月27～28日
群馬大学刀城会館

第10回大会(東京都)(10周年記念大会)(小
林英司／委員長)

1985年(昭和60年)12月4～6日
日本学生会館

第11回大会(北海道)(高橋裕哉／委員長)

1986年(昭和61年)8月22～23日
北海道大学水産学部講義棟

第12回大会(愛知県)(大西英爾／委員長)
(第1回アジアオセアニア比較内分泌学会議
との共催)

1987年(昭和62年)11月4～7日
愛知貿易センター

第13回大会(奈良県)(川合禎次／委員長)

1988年(昭和63年)11月25～26日
奈良女子大学学生会館

第14回大会(長崎県)(玉置文一／委員長)

1989年(平成元年)11月18～19日
長崎大学薬学部

第15回大会(山梨県)(加藤順三／委員長)

1990年(平成2年)11月17～18日
山梨医科大学

第16回大会(三重県)(廣瀬慶二／委員長；
乾靖夫／副委員長)

1991年(平成3年)11月21～22日
伊勢シティープラザ

第17回大会(岐阜県)(田中克英／委員長)

1992年(平成4年)10月1～2日
岐阜大学農学部

第18回大会(東京都)(高橋迪雄／委員長)

1993年(平成5年)8月25～26日
東京大学山上会館

第19回大会(群馬県)(今井勝俊／委員長)

1994年(平成6年)8月24～26日
前橋テルサ

第20回大会(静岡県)(矢内原昇／委員長)

1995年(平成7年)10月26～28日
静岡県女性総合センター

第21回大会(埼玉県)(能村哲郎／委員長)

1996年(平成8年)8月21～23日
浦和市文化センター

第22回大会(新潟県)(野崎眞澄／委員長)

1997年(平成9年)7月3～5日
佐渡中央文化会館

第23回大会(岩手県)(川内浩司／委員長)

1998年(平成10年)7月31日～8月1日
釜石市民文化会館

第24回大会(愛知県)(山下興亜／委員長)

1999年(平成11年)7月22～24日
名古屋大学シンポジオンホール・豊田講堂

(名古屋大学)
第25回大会(石川県)(櫻井勝/委員長)
2000年(平成12年)11月2~4日
能登勤労者プラザ
第26回大会(東京都)(菊山榮/委員長)
2001年(平成13年)12月1~2日
早稲田大学国際会議場
第27回大会(岡山県)(高橋純夫/委員長)
2002年(平成14年)11月29~30日
岡山国際交流センター
第28回大会(富山県)(内山実/委員長)
2003年(平成15年)8月8~9日
富山大学理学部・黒田講堂

第29回大会(奈良県)(大石正/委員長)(第5回アジアオセアニア比較内分泌学会議との共催)
2004年(平成16年)3月26~30日
奈良県新公会堂
第29回シンポジウム(設立30年記念シンポジウム)
2004年(平成16年)3月26日
サテライトシンポジウム 奈良女子大学メモリアルホール
2004年 日本比較3学会合同シンポジウム
(以上 山本和俊氏のまとめ)

On the Thirtieth Birthday of the Japan Society of Comparative Endocrinology

Howard A. Bern
Professor of Integrative Biology emeritus
University of California, Berkeley
U.S.A.

It is a real pleasure and a true honor to be invited to give this brief presentation on the occasion of the 30th anniversary of the founding of the Japan Society of Comparative Endocrinology, a society which is still a vital and growing group on the national and international scene. I value my status as honorary member. I have attended our meetings from time to time during 29 of the Society's 30 years of existence. I missed its birth, but gave the first gaijin plenary lecture at the second annual meeting at Gifu.

I have strongly positive feelings and great admiration for the Society and for Japanese comparative endocrinology generally. I have seen the field develop brilliantly in Japan, and its science has had a worldwide impact. My

first contact with Japanese comparative endocrinology began with my friendship, now virtually enshrined, with Professor Hideshi Kobayashi in 1958, when he was then a joshu-assistant--at Tokyo University. We met at the Second International Symposium on Comparative Endocrinology at Cold Spring Harbor in the U.S.A., which was organized by the late Aubrey Gorbman, then at Columbia University. Kobayashi worked together with Dr. Richard Nishioka and myself in 1960 at Berkeley, using the hypothalamus of the parakeet as our object of study.

That period in 1960 must have been rather puzzling for the young Kobayashi, as he moved (more accurately, was moved) among the laboratories of Gorbman in New York; Al-